

## 羊の学校／よみがえれ「衣の地産地消」

谷口吉光（秋田県立大学）

「この帽子はうちで飼っている羊の毛で編みました」

一瞬、何のことかわからなかった。目の前にいるのは県職員を定年退職したAさん。田沢湖近くの実家で2頭の羊を飼い、その毛で帽子などを編んでいるという。家で羊を飼う？ その毛で帽子を編む？ 恥ずかしながらそれまでまったく聞いたことがない話だった。

2年前に聞いたこのAさんの一言がきっかけになって、秋田の「羊毛」について調べることになった。驚いたことに、羊の話をするとうち50代以上の農家出身の人の多くが「んだ。うちにも子どもの頃羊がいた」「春になると職人が毛を刈って工場に持って行き、あとで毛糸やセーターになって返ってきた」「自分の好きな色のセーターが戻ってくるのが楽しみだった」などという話をしてくれた。

農業統計を調べると、1957（昭和32）年には日本全国で約100万頭、秋田県でも約34,000頭もの羊が飼育されていたことがわかった。飼いやすく、自給飼料で育ち、毛・肉・皮が利用できる羊は、農家の自給的生活に適した家畜と見られ、戦争直後のモノ不足を背景に、国が農家に羊の飼育を奨励したらしい。

いつの間にか中国製の安い既製服を着ることにすっかり慣れてしまった私たちだが、つい50年前には秋田でも自分で着るものを素材から自分で作る「衣の地産地消」が当たり前だったのだ。「農家の子どもはあったかい純毛のセーターを着ていたよ」などという言葉で聞くと、当時の自給的生活がいかに豊かなものだったかが感じられる。

ところがその伝統は今や風前の灯火だ。県内で飼育されている羊の頭数はわずか50頭前後。唯一まとまった頭数を飼育しているのは白神山地の麓・藤里町くらいしかない。しかも藤里町の羊は「サフォークの館」などで提供される羊料理の材料として肉が利用されているだけで、毛はまったく利用されていないのだ。何ともしないと思うのは私だけではないだろう。

そこで、仲間と一緒に羊毛利用を勉強する「羊の学校」というプロジェクトを立ち上げ、秋田市の鈴木美保子先生の指導を受けながら原毛の処理、毛洗い、梳き、染め、紡ぎなどの技術を学んだ。

私は欠席の多いダメ生徒だったが、それでも人なつこい羊のかわいさ、ふわふわした羊毛の手ざわり、紡ぎ方によって見た目が変わる毛糸の風合いの不思議さ、染色した毛の色の美しさ、綿・フェルト・糸・編み物・織物など羊毛の多彩な利用法など、本当に多くのことを学ばせてもらった。

こうした2年間の成果をとりまとめ、10月27～28日に秋田市大町のココラボラトリで「羊の学校 成果発表会」を開催する。羊毛の多様な魅力を楽しみながら、私たちの身近にある「衣の地産地消」の可能性について一緒に考えてみませんか。

（朝日新聞「あきた時評」 2009年10月21日掲載分を加筆・修正した）